

繪本拾遺信長記

後篇

五

特別

〜13

2507

18

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4

門 遠
2507
23-18

繪本拾遺信長記後篇卷之八

目録

秀吉と重幸戦小清水軍

根来乃小密茶屋戦 二葉

羽柴珍本小清水又對戦

重幸布八陣戦秀吉軍

猪子兵羽柴が陣へ侵入

秀吉豫敵方の夜討を察し

秀吉重幸同言

重幸八陣を布て秀吉と闘む

竹中半兵衛八陣を破る

小密茶討死の事

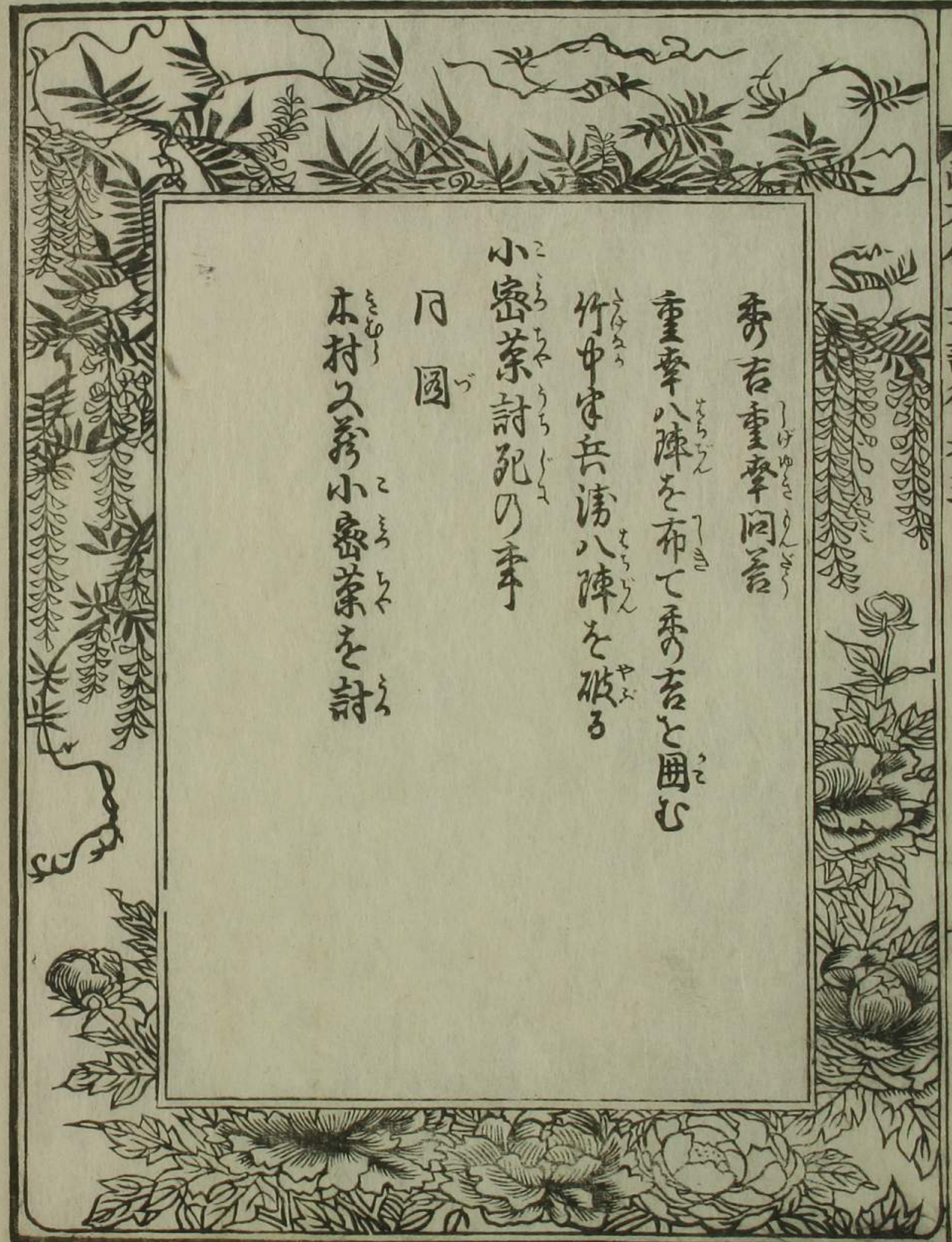
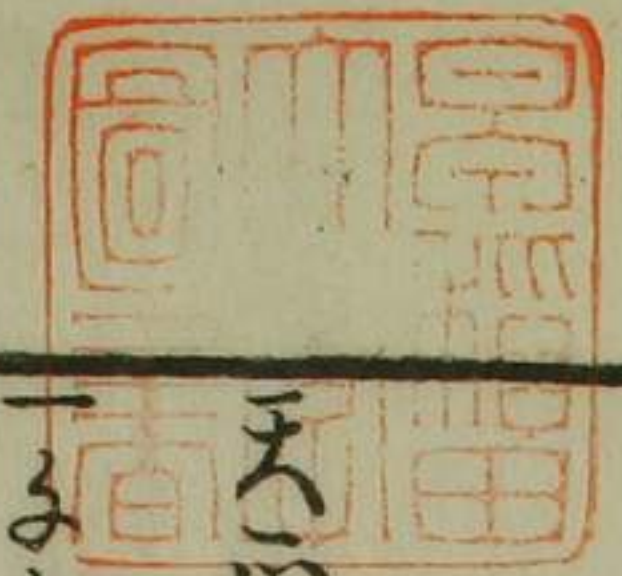
月圖

本村久秀小密茶を討

繪本拾遺信長記後篇卷之八

秀吉と重幸戦小清水事

天正六年二月廿八日石山乃軍師鈴木源左衛門尉重幸八陣
 一万余騎の兵と小清水の陣を布て秀吉が坂川の陣に入書と送
 る秀吉先を以てよくも重幸が戦死と人き心を推し
 返書と送て其後川を渡り重幸が陣と其間十余町を隔
 陣と云い時三位中納言信忠卿石山乃軍師鈴木源左衛門尉重幸
 秀吉重幸討死の事」
 其勢一万三千人秀吉が陣せ」坂川より出張
 軍威と輝いて戦いを後け給ふと云ふ小秀吉重幸の両勢
 互に陣と押し出」矢以近くつる所又先鋒波と戦」双方一依の



根来の
小密葉
血刃



鉄砲を射し、炮煙の下より突出、小倉城やよりたんとわたり
 けいてぞ戦ひつゝ、重幸が先ぬ石山城の中より、勇名のおへるに
 根来の悪僧、小密茶三百余騎、つゝ、先ぬ馬とわたり、せ例
 の八角旗、ひらく、とわたり、羽柴が先陣、中村孫平、治源、尾常
 刀が七百余騎、の其中へ、韋駄天のてゝ、叫て、けい入、人馬
 のき、ひらく、とわたり、とわたり、小武の隊を、腹内へ、おこ、れ、武の
 中、天、又、叩き、つゝ、勇と、つゝ、と、要戦、は、は、誰、は、是、と、人、き
 中村、治源、が、陣、机、を、え、と、三丁、斗、い、つゝ、れ、り、つゝ、つゝ、是、と、見、て
 中軍、又、扱、つゝ、鈴本、重幸、又、百余人、と、先、ぬ、小密茶、が
 戦ひ、を、た、ぬ、と、秀吉、乃、を、陣、へ、一、文、字、に、突、つゝ、れ、羽柴、が、勇、名、
 朝比、孫平、勝、源、又、小、密、茶、又、百、人、と、一、人、余、人、を、右、より、わけ、合

せ、重幸と中、又、え、と、火、を、ち、り、し、戦、ふ、つゝ、重幸、元、来、万、人、
 出、の、勇、あり、徳、の、り、つゝ、三、尺、に、ま、り、乃、治源、編、妻、の、てゝ、い、つゝ、
 じ、又、百、余、人、の、後、幸、と、又、り、つゝ、進、退、し、其、さ、ま、の、と、げ、き
 の、始、も、天、津、の、てゝ、羽柴、が、勢、恐、怖、し、て、進、も、得、ぬ、勝、源、又、
 多、の、あ、ぬ、と、勢、と、つゝ、百、挺、斗、の、鉄、砲、を、重幸、が、勢、の、中、へ、一、日、又
 づ、と、お、入、と、つゝ、え、つゝ、と、つゝ、お、入、透、る、り、つゝ、鎗、と、入、突、崩
 ん、と、揺、る、り、つゝ、鈴本、重幸、と、つゝ、大、き、小、怒、り、鎗、を、い、海、川、て
 づ、つゝ、鉄、又、出、つゝ、突、え、つゝ、戦、へ、再、び、羽柴、方、つゝ、つゝ、
 是、も、日、一、く、三、丁、斗、引、つゝ、つゝ、け、い、の、戦、ひ、に、じ、つゝ、と、居、や、後、陣、又
 備、し、鈴本、孫、市、志、摩、又、に、即、右、人、ま、り、て、秀吉、が、旗、本、切、て
 つ、秀吉、が、旗、本、の、勇、士、加、茂、虎、之、久、福、海、市、松、行、相、助、他、本

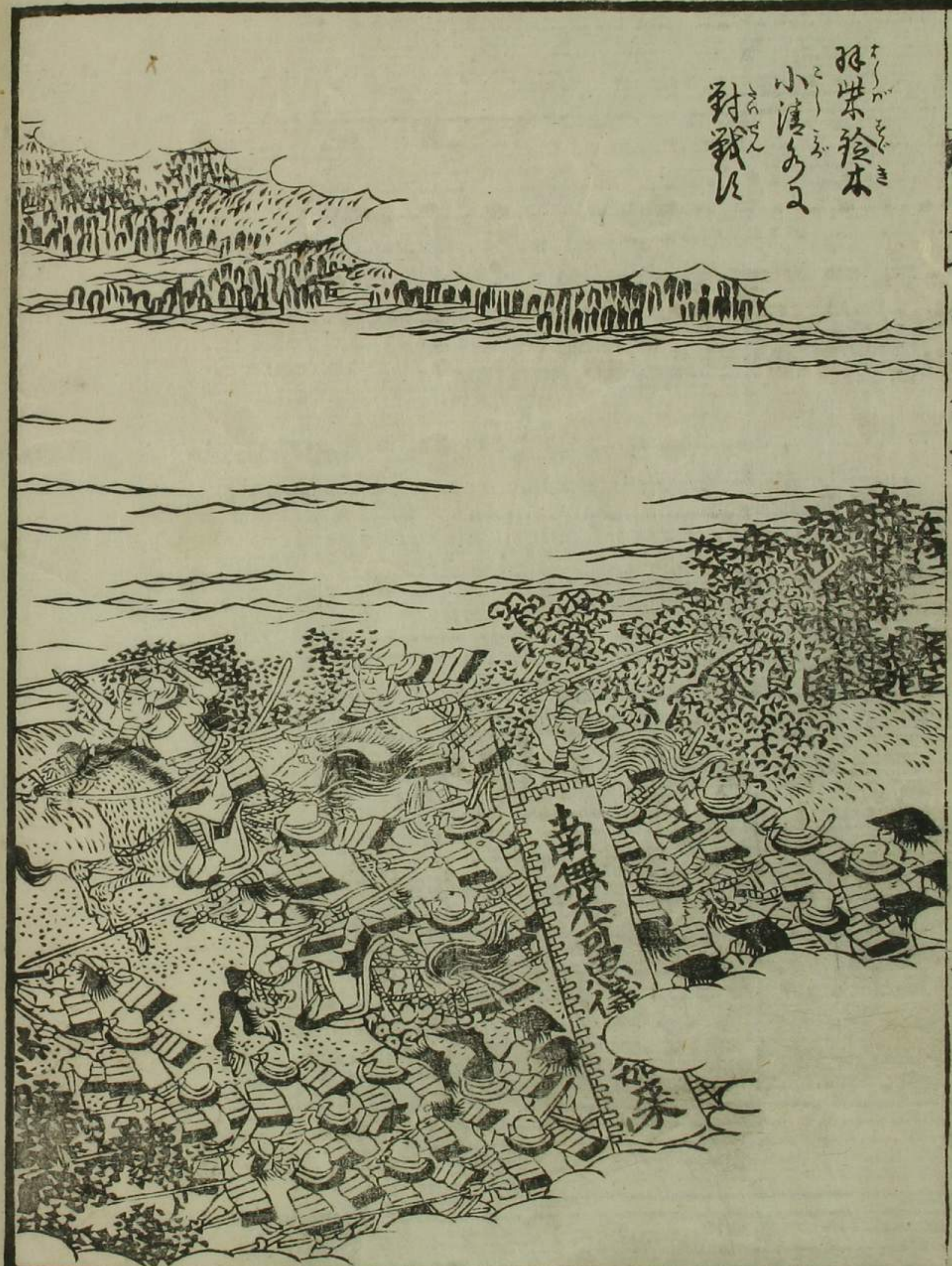
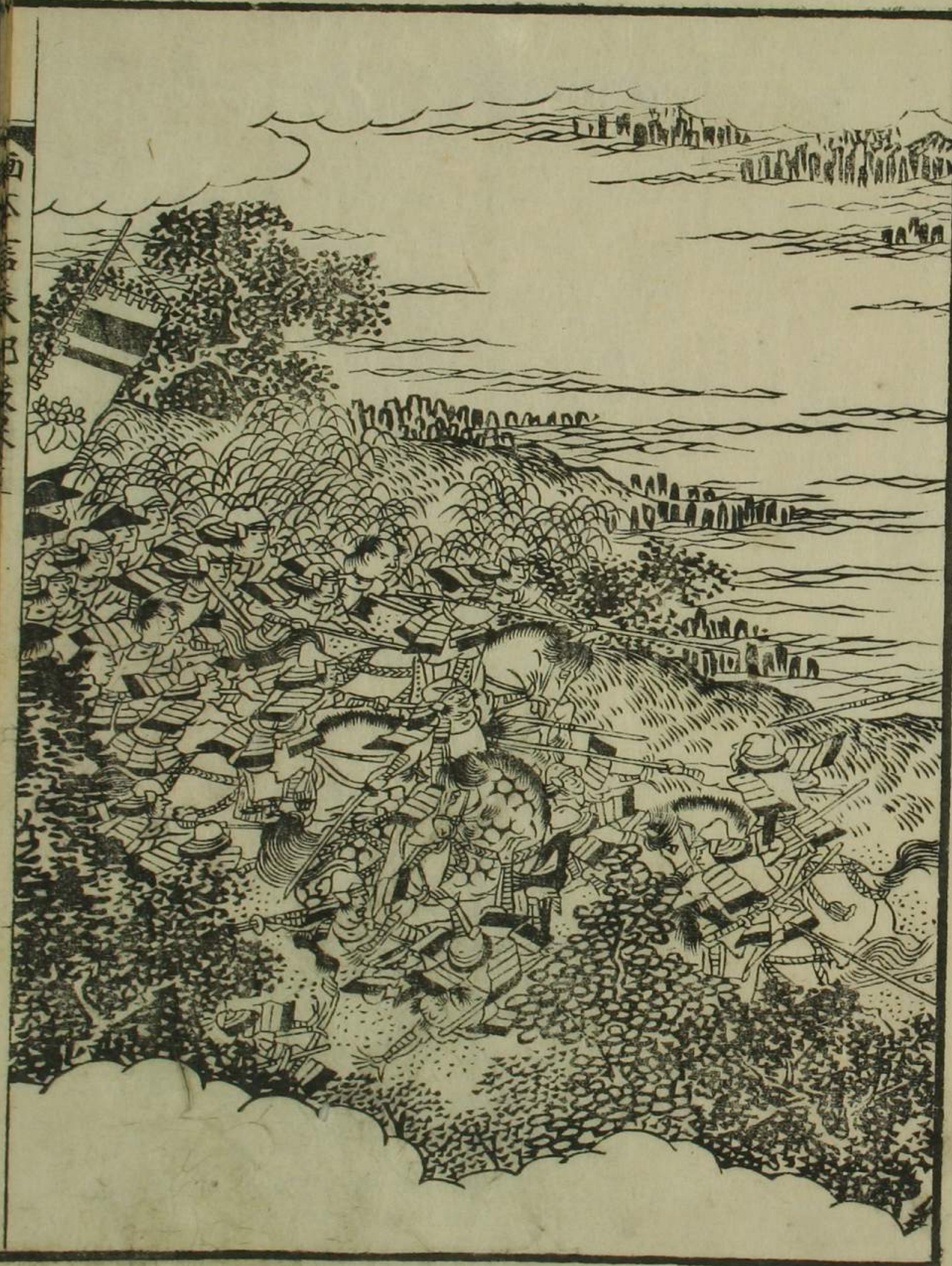


其二



其時平秋坂新内が軍槍をあげていふに我ひ互方必驚の勇士な
 るに陰陽用困虚く空く進みまゝつ辰越すり申のく息
 をもつに我ひに烈しうろ合戦なりけ時羽柴が先陣中村
 源尾肥カを盡し血戦とれと小密策が勇壯にうめく傳へと三辰
 又切刻と人なぐれよ若て敵をとれば二陣後陣も煙る崩し羽柴
 方級龍既よりうれう川の小岸よは三辰中ぬ信忠郷にじ
 すり同じ放るに合戦と沖渡じろろとやあきつ陣脚乱
 うろそ川を渡して敵へやとりし後人明智先勇惟後長秀
 六ふ余人の勢を率し既より川岸よ縁もろり耐石山すりも援兵
 と見え其勢ん又ふ計南を阿弥陀佛の旗三十余流川風
 又吹るいふをきく夢を押しきり小ぞついやあき合戦ふ

ぬらんと勝つていふ者なしけ時を率いふとあひ急引退
 と吹立陣とくし軍兵をまどろま所く小清水の陣陣引
 なるふ小岸吉と又敵て我ひとめく日く勢を引へ陣と固
 め敵とくし傳へうろ敵又双方希代の名おるにうろ
 法より引し則あり軍率と進退とろり恰も風のふきと吹
 すりも戦勝しけ時信忠郷の御勢い合戦の敵じうろ
 川と渡るに再び陣陣引へろろろ猪子兵をみて秀吉が陣
 又あつたれ同せ移るに鈴本を率勝る系どる國成とけり
 軍をまどろしいうろあつた秀吉若て是に信忠郷の御勢
 川と渡るにだれあつたをそりへるあつたとくしはじとの計
 いそりし猪子又曰く石と城より後治の勢入るを率



孫策
 小漢
 對戰

日本書紀卷之五

が我ひを助んとし中おの河勢川と後とも何の思ふ
みんきやあちを多くし候ふ勢ありし森氏指し「是れ人
け森又軍兵成強し」と三百人の埋伏とて「我れ森が軍法
と違ひたるを知れり森又兵成引よる幸伏兵の
んめを思ひし勝軍とありしなり我れ却てけ森一人も伏兵と
けを幸ふしつゝ森の敵うしんは伏勢とありし破る」とい
おの甲乙より討る計も又將あり猪又曰く重幸が引よる時
討ふ計は勝利ありと小室下をなむといふ小室吉吉て其時より
中おの河勢岸は強し既し川と後とも其重幸と追ふる勢あり
を河勢よりしお後て其が我ひを助け大おの河陣を勢ありし
く軍法と違ひ兵を用ひるし森氏乃て石山の後兵をなむ幸ふけ方

より川を後し信忠御の本陣と討んし後よりけりてなりとて「自他大
おの河勢よりしやまらあしを幸ふと見者百人討ふ」とい何の勢あり
みんき此をみて其軍とあし河勢の川と後とも成止めし猪又兵成
議とて感嘆とて「是れ功者の軍法なり我軍の後学ありと記
てなるは」きりてしけち中おの河勢と違ひる感嘆あり
るまどしとてけり河本陣へゆりたり

重幸布八陣我軍の吉幸

其夜我軍本陣外より出たりし小重幸が陣と強し人れた
るびき後る霞の間に兵糧炊くけりしゆりくとも
のがより我軍を見し叔父重幸我陣へ顔討しとるなりとて
いそぎ陣外にゆり朝建坂尾勝領が中村が守とてい



猪子兵助
陣一
復に

て豫合戦乃用とては「近習の士斤切助也とて後し
 たる汝馬とて川と後」信忠卿乃本陣とありやどれた
 鈴本重幸今宵来ぬと陣と疾討仕べき諸捕ねと足居
 いしと合戦にじまりいともかまへず所勢と分る所助勢
 及び中はじくは来ぬと人とも鈴本とれた者の
 よりろき級軍は仕るはじきよは且に所本陣不勢といへり
 る山より出来せんともうづら其上は迄の百姓た
 一向宗門乃若多くともへ密に石と計略とあり合せ
 奇兵とあり龍多の来んと計るなり何と所ゆん
 かく堅固と陣不瓜を囲めらるゝとどれた者大ぬへ中とせ
 よと助也と後し是今の心と折るる露斗はし今とい

重幸と討んとす等の内とありと心飲む時刻の移るをお
 待たり鈴本源九郎門耐重幸の通て討死と覚悟をいめ
 られん城とゆふ人き心とるなり信忠来ぬと討て其泉の
 若廻とぬれ若とるなり一言の我志と告ぐなりと
 少しく計策と構へ鈴本源市志摩と即と大ぬし其勢
 三百余人鉄炮火氣投ねるを多くおせ疾乃子魁むり
 川を渡し信忠卿の陣と疾討せむ其方より百余人先
 進も根来乃小密来ぬと百余人後陣と隊石より来りし
 軍勢の陣不れと奇兵とるなりは同時と来ぬと陣不
 明な門めてととせり羽柴が陣不は焚とてとるなり
 きえぐと用とるなりと人といはる國の事をとるといはる重幸馬と

いさよ
秀吉
あつじめ
敵方の
検討と
あはれ



おどく陣中へ突へられ無に物に空しく本に投より
其附款一人も何れに南無三寶を計略に漏り
ぞや急を引んとせむ却て味方敵軍なるをけりて
之款のも御見物せよ小密茶が勢と一たびあり急隊
を八門にまきけり人々に欺し其火は希代の名おる
と世人こそ門を突破せり抑八門の陣とて昔時
帝の臣風后氏天地風雲龍虎鳥蛇の八つの物をわたりて
陣門に配し雲を逐麻の巾に滅せり三國の附とて諸
葛武侯は陣法と考て夷後浦永安宮の南灘の沙のうへ
石とせり八陣と布人々けり八陣とて八陣とて八
六十日の門とあり教て破て出るを得るは風雲霞重て

非の獲とる者の下に重幸は八陣とて八陣とて天
地載凡揚雲雲龍虎翼鳥翔蛇蟠の軍隊とつて
馬を三款の配り給けり方に八面悉く羽柴が伏兵
とて朝に孫平中村孫平次右より勝頼が小六
平後より源尾助より羽柴龍平守頼平の軍兵を引
て教の炬火二日は照りやき風より霞を火と
る小元来暗黄燭硝とてきり八方より重幸
が陣は火勢おひききも奇なる八陣の火のふり
ゆるく揃のふり槍とてお息とておけりけり
羽柴馬と馳せり羽柴龍平守りつてありや鈴本
源虎門耐見事いへんともおひきり八陣は馬と



同書
卷五
南和不可
南和不可
南和不可



即ち右は加藤虎之次行切助惟平控後平あり虎は後津市松
加藤孫六秋坂甚因あり何ともし劣らぬ方丈不遇の勇士重幸と
多えよとんと眼と配りて引居り重幸是と見く馬この礼と
外ひ夢とよくやうの先よあがの戦書と摩く一語我速園
の雲と開き城とゆく雲は足下と討戦しと候よく討死を遂ん
とん改めやと及んともも本親寺殿如上人元来信長云と討
し瑞多成ととさきりあてこれに敗年謀計と揃し討敵
とあたるい某一人がふる業は足下厚勝りわ我前と信長云と敵
この如くと解と今く本親寺と立居る人きあしとく吹率
わが美水のりひあひく足下の徳と教ふとあがあはる意と
言て曰く汝がふる其外いと異に討死と期して我と討戦せば

何ぞりきうくはし正兵をひて戦つて後討とくとい何をや
今あがあが謀中と漏りわがう尚虚言と吐て人と欺んととや
吾用の河を費んするい汝が宗門の念佛と唱へ刀の刃よあつと
待べしとく重幸言て大は如く後面の小冠者右の根と切さけ我
討死の伏よはとんと槍と捨りて突来とはあがは馬と陣
あに弛ゆし重幸と槍と合せ二三合突合しが羽柴が近士加藤
行切平井秋坂精谷が軍主人あやまらあが悔むとくい
はしと左右より一月とど門と悔いて突来とは重幸あははしと
やあひく馬とくして味方の陣へ弛込よりあがあはる意と
うけ先の言よもあはれ歎又後と見とくこそきたる人れく人せく
とあがりくあに二あ三と退りくく重幸の小き丘と張りく圍

八陣を
 重々
 布て
 秀吉
 囲む



西本信長言行巻五

十四



西本信長言行巻五

十五

扇と用き一うび味方を振けが忽ときの人八方に起り金鼓の
 響き天を震き天軍地軍乃二軍巻せて奔るを左右と圍む
 加後後降るを是と云ふ人々怒り追する者と斬るを伏撃
 の荒る勢いにて破んと戦ふを以て龍軍と云ふ
 軍の隊と云ふに方より圍みて鉄桶の如く奔るを龍軍と云ふ
 人多くと云ひて右に突きたる突てもけ圍と云ふを龍軍と云ふ
 朝神中村勝領賀足多の勇士各三百余人の兵と卒したる
 より重率の勢の中へ面より切金ば風雲鳥跪のに軍一
 度三十二隊の隊と云ふに隅八面よりむづぐり切り鉄炮を
 飛し矢と放り雨よりと勢く羽葉が軍兵討る者殺と云ふ
 比朝神勝領賀足多の勇士各三百余人の兵と卒したる
 比朝神勝領賀足多の勇士各三百余人の兵と卒したる

若先馬を踊らせ槍をとりて突刺し勝戦と云ふを龍軍と云ふ
 霧の中へ戦ふと云ふ敵乃兵卒の雨の如き勢いにて
 突とも切ともけしもひるまは鯨波八方に散る出べき
 中にもなりなりと武功の羽葉を後重率の八陣と
 又用いて伏らと云ふや只今討死とやしつんと危きもの
 計は又濃州の浪人又竹中や中務重治と云ふ者あり廣く
 漢乃兵書と云ふて天文と地理と要人中人中と云ふ
 らる敵軍滅亡の後羽葉が軍兵討る者殺と云ふ
 が軍學兵法の師なり此時も秀吉と云ふにけり出張せしが
 八陣と布て奔るを是と云ふ人々怒り追する者と斬るを
 伏撃の荒る勢いにて破んと戦ふを以て龍軍と云ふ
 軍の隊と云ふに方より圍みて鉄桶の如く奔るを龍軍と云ふ



竹中半兵衛
 八陣を
 破る

日本書紀卷五

能くは海軍兵と引て敵の風陣より馳入くはしうゝ近通りを陣
 を折破りたゞうぐりて天陣とけ接連と折て龍軍と突崩とを
 此陣忽破りてあちを斬るに「折尾陣で命を受け陣門を閉ふ
 重治馬より橋にして八陣八門ととくをに」押ゆ夢刀敵は先
 馬と龍「龍波一を喚くと」に「が彼風揚の陣へ」又「突入て」
 陣とわけ破り竹中がを「へ」のぞくたゞう右におけ切先ととみ
 突立とは忽八門の陣をうくくと「此」崩と右に龍は「此」崩と
 重得りやかりに「と」此「懐多」天地とつ「ぬき」
 是は鈴本が兵馬只「これ」極風の「此」敵と「此」敵と
 て「此」敵と「此」敵と

小密茶討死之

け時鈴本源を勝門耐重幸に「し」布つ「此」八陣
 崩と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 今ぞ我死とんき時「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 を「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 羽柴が兵を「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 来り武者あり「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 馬と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 美和の「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 心「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と
 の「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と「此」敵と



小
討
密
茶

其何系云甲斐とて討死して後代又悪名を誅せんや汝我子と心
かけばあり歎の中へ切入りたる者又近づく事なりと遠く討死
せよこれぞけせの別なりと云ひ終るる小羽柴秀吉が軍兵中
震のどく周と他門を退走は小密茶馬と立由大羅刀と水が海
に迫りしむり来る大軍の中を母門と鳴いし難きるる我の蛇の天邊
よりどいと切て両股と切り横より入るに横より武若羽切又斬倒されま
る中又三十余人をくくと難逃し勝利又天神の荒るるく横横
を難く驅ちてせばいさゝ勇に羽柴が軍兵小密茶一人は切まらるるに
方へは門と退るるく小密茶勇力ましく加りしりれ秀吉ふらうくき
より肩とたて冥途乃ち春にふらんのと撥らんなるるく小羽柴の向ふの
方ふふ生瓢軍の大馬車朝日くやとさくめれたれに秀吉乃ち陣又三

つれと一鞭りて飛ひ石に朝中村膳領が屋敷が軍勢擁の板の掛合
をまけ入るに挺て緊き合せをくくく物に喰ひ城の小女垣の
ぶく其櫓板よりくくを抜間を開き内より弓矢砲をひておまきい
は乱軍の中へ忽ちと城郭の中へ出るるくくは強勇不敵の小密
茶も驅破る人きやうくて歎の配難を引くくとして櫓板よりくく
る矢玉をは長刀とておまきい櫓板よりくくは強勇不敵の小密
方乃兵士の中より軍兵乃小具足は城の中へ出るる大男まうげな
るたぐはき馬は勝りに尺余りの太刀板をひく小密茶と小板は
いふ小羽柴の物にきくくくは行服くくくは我の加差虎くくは
秀吉小羽柴又秀吉の日本を攻め乃大力の者なるぞ試み一太刀受てくく
この種を知りて後人との太刀力美向はしきくははくははくはくは



日本書紀卷之八



本村又亮
小密茶
を討

小密茶少き廣まゝいで引降してけ世のいゝまゝとせんと藤刀おろ
 まむといふと夢とくると人か忽ち力用いふ門と鳴りあ馬乃足
 者神壯と徹しあくあ雷のてく小密茶極虎乃勢ひをぬし藤
 とは又新柳腰の勇と配してをどり入一姓一素を後をさへけ付むりり
 人ませせに我入るる是や今日の足物なりと兩軍鳴りとをりめて
 足物小密茶いふ飛が武術勇力よりつこの敵よりい謀計をぬて
 討たんと馬の尻をくして逃るるを又飛あけきこはし人勢と
 鳴り門と又二股むり退る小密茶よりうりうりまは長刀をのふ飛
 か馬の尻ををりうりうり切うりうり馬の尻尾をたふしうりあ
 うり又飛まうりうりさす小密茶と人か小密茶が馬のあはりうりには
 うりかまうりやと人せは小密茶たまりて大地へかんとあはるるをこ

飛龍うりうり二カにけり首とぞたうりうり

繪中拾遺信長記後篇卷之八終

画本傳長壽卷三

廿三

